

# アグネス論文における 〈非ゲーム的パッシング〉の意味

—エスノメソドロジーの現象理解についての若干の考察—

樫田 美雄

## 《キーワード》

ガーフィンケル、ゴッフマン、非ゲーム的パッシング、相互反映性

## 《目次》

- I. まえがき
- II. 「アグネス論文」における「非ゲーム的パッシング」の意味
  - (1) 「アグネス論文」におけるガーフィンケルのゴッフマン批判、あるいは達成目標の基準のないパッシングの存在
  - (2) パッシングの範囲とゲームの範囲のずれの確認
  - (3) 「アグネス論文」と「相互反映性」
- III. エスノメソドロジーの現象理解：基本的ルールの相互反映的構成、あるいは「トラスト論文」における基本的ルール
- IV. 相互反映性の両義性
  - (1) 相互反映性の両義性
  - (2) 相互反映性という無根拠さの意味
  - (3) 相互反映性の肯定的側面＝ある「精神病者」施設の事例から＝
- V. おわりに

## I. まえがき

日本のエスノメソドロジー研究は現在第三期と呼べる時期に入りかけているように思われる。第一期（1970年代）では、アメリカでの研究状況が理論的に紹介され、第二期（1980年代）では、日本の研究者によってさまざまな実証研究・応用研究がなされた<sup>(1)</sup>。この応用研究においては、明示的に反差別の立

場がとられ、「差別的な」我々の日常がエスノメソドロジーを道具として批判された。これに対し、現在始まりつつある第三期（1990年代）は、以下の二点で特徴的であるように思われる。

①まずそれは、理論帰りの傾向を示している点で特徴的である。しかも、その理論的検討は自力で純理論的な新展開を試みる理論形成志向のものであり、第一期とは質的に異なる。山崎敬一の仕事〔山崎、1990〕を例にあげることができよう<sup>(2)</sup>。

②次にそれは、第二期とは違った観点からの応用研究がなされ始めている点で特徴的である。通俗道徳（＝常識）を密輸入した上での反差別－日常批判的言明（＝現状批判的言明）は禁欲されている。西阪仰の仕事〔西阪、1990〕、〔西阪、1991〕は典型であろう。

私は、この第三期の方向性は、日本の社会学研究を豊かにする基本的に肯定されるべき内容を持っていると考えている。自分自身、〔榎田、1991a〕では、上記②に相当する研究を志した<sup>(3)</sup>。

私は、第三期の研究に今後とも参入していきたいと思っている。しかしながら本稿で行なわれているのは、この第三期への直接的な参入ではなく、参入への準備作業にすぎない。すなわち、②のような実証・応用研究が可能であることを示すこと、②のような立場であってもエスノメソドロジー研究の伝統に足場を持ったものであることを理論的に裏付けること、これらのことの（アグネス論文における「非ゲーム的パッシング」という事態を吟味するという道を経由しての）達成が、本稿では意図されている。

見通しをよくするために、まえもって議論の概略を述べておけば、以下のようになる。

まず次節では、「アグネス論文」〔ガーフィンケル、1967b=1987〕におけるガーフィンケルのゴッフマン批判の意味を吟味する。手始めに、ゴッフマンの「ゲーム的パッシング」に対し、「非ゲーム的パッシング」を対置するガーフィンケルの現象理解の異様さを指摘する。なんとそこでは、行為者（＝アグネス）は予期されないルールにしたがってパッシングをすることが可能であるとされているのである。ここから、エスノメソドロジーの現象理解の特徴として「相互反映性（reflexivity）」に基づいた秩序生成（＝ルール生成）を日



常的なものとして強調する現象理解であるという点の確認をしよう。もし（アグネスにとって）結果的に状況の適切さが維持されていたならば、事後的にバッシングは成功したことになり、ルールもそのような状況証拠から事後的・選別的に認知されることとなるのである。（第II節）

ついで、アグネス論文でのこのようなルール理解が、エスノメソドロジーにおいて例外的なものではなく、本質的なものであるということを、「トラスト論文」〔ガーフィンケル、1963〕をもとに解説する。（第III節）

さらに、相互反映的なルール生成は両義的なものであるという議論の例示として、相互反映的なルール生成のプラス面を示すと思われる事例を提出する。最終的に、日本のエスノメソドロジー研究に対し、従来の「解放的主張」と直接に結びついたものとは異なる、新たな応用研究の方向の存在可能性を提案することになるだろう。（第IV節）

## II. 「アグネス論文」における「非ゲーム的バッシング」の意味

本節では、アグネス論文におけるガーフィンケルのゴッフマン批判の意味を吟味する。但し、検討にあたっての私の関心はガーフィンケルの現象理解の特質を明らかにすることに対して向けられており、ガーフィンケルのゴッフマン批判が妥当なものであるかどうかという点については吟味が及んでいない。この点を前もって断っておきたい。ゴッフマン批判の当否および批判の学史的意味については、将来、稿を改めて論じる予定である。

### （1）「アグネス論文」におけるガーフィンケルのゴッフマン批判、あるいは達成目標の基準のないバッシングの存在

『エスノメソドロジー研究』の第5章「両性的人間の性的地位の管理された達成とバッシング、パート1」（略称「アグネス論文」）〔ガーフィンケル、1967b〕でガーフィンケルは、ゴッフマンをかなり手厳しく批判している。批判が述べられている部分を中心にいくつか引用してみよう。

引用①「アグネスの通過作業 (passing) の現象は、ゴッフマンの社会的に認められるための印象操作の作業についての記述となじみやすい。だが、こうした〔ゴッフマンとの〕なじみやすさは、表面的なものにすぎない」〔ガーフィンケル、1967b:165=1987:274〕（下線による強調は檜田。以下同じ）<sup>(4)</sup>

引用②「ゴッフマンの解釈手続きの難点は、その見方をアグネスのケースの他の側面〔＝信頼に基づいて行為しがたいとき、ルーティーンが慢性的に問題をはらんでいるとき〕を分析するときにはっきりする」〔ガーフィンケル、1967b:174=1987:280〕

引用③「ゴッフマンの分析はすべて何らかのエピソードを具体例としてあげるか、あるいは彼の分析図式によって分析される状況をエピソード的なものに変えるかしている。だが、戦略分析〔＝ゴッフマン的分析〕は、出来事がエピソード的なものではない場合にはうまくいかない。……（中略）……こうした〔ゴッフマンに対する〕批判は、アグネスについて語るとき、彼女が女性として通過した (passed) という表現の不正確さを指摘することによって、不十分ではあるがまとめることができる。むしろ、彼女は、女性としての通過作業を行ない続けた (passing) という活動的な叙法で表現することが必要なのである。こうした表現は、文法的には不適切であるが、アグネスのトラブルがどんなものであるかを要約している。また、彼女のトラブルがどんなものであるかを正確に適切に記述する際に我々が出会うトラブルもうまく要約している。」〔ガーフィンケル、1967b:167=1987:276〕

引用④「ゲームとして分析することのできないさまざまなバッシングの機会が〔アグネスには〕あった。そうした機会は、たえない展開をとめないながらつねに継続していくという性格をもっていた」〔ガーフィンケル、1967b:149=1987:266〕

引用⑤「エピソード的性格、事前の計画、規則 (rules) に対する道具的知識についての信頼というゲームに特有の性格」〔ガーフィンケル、1967b:142=1987:256〕

引用⑥「性的通過作業に特有のデータは、ゲームモデルを適用すると構造的な不一致が生じるために、ゲーム概念で明らかにするのは困難なのである」〔ガーフィンケル、1967b:140=1987:252〕



引用⑦「〔ゲームの形式的特性として、ゲームにおいては〕プレーヤーはそのプレーにおける基本的ルール (the basic rules) を知っており、そうしたルールは絶えず変化するゲームの進行状況やそこで取られた戦略から独立して存在している」〔ガーフィンケル、1967b:141=1987:253〕

引用⑧「ある目標が達成されたかどうかを示すための基準 (criteria) の存在は、ゲーム活動の本質的な特徴である」〔ガーフィンケル、1967b:148=1987:265〕

引用⑨「アグネスはある種のゲームに関与していたというわけではない。また、それ〔＝アグネスの状況操作〕は、あたまのなかで理性的に取り扱うことのできるところまでいった、というわけでもない。さらに、アグネスが、自分の自我をうまくコントロールして、ある性的役割から別の性的役割へ、気楽にでないことはもちろんのこととして、ともかくもうまくスイッチできるところまでいった、というわけですらない。……アグネスはゲームプレーヤーではなかった」〔ガーフィンケル、1967b:165f.=1987:274f.〕

引用⑩「〔ゲームモデルでは適切に分析されないパッシングの機会においては、〕『規則 (rules) 』は、現実の相互作用の過程を通して、実際にその場面に参加し、しかもそこに含まれているリスクを受け入れることによって学ばなかった」〔ガーフィンケル、1967b:146=1987:261〕

引用①②から、ガーフィンケルがゴッフマンの分析はアグネスのパッシングの分析に向かないと思っていること、および、その原因として、ゴッフマンの分析がエピソード的な出来事にしか対応しないという点を指摘していることがわかる。また、引用③④からは、ゴッフマンの (passedと表現できるような) 一回完結型のエピソード的パッシング (通過作業) 概念がガーフィンケルによって批判されていること、および、代わりに提出されるパッシング概念は (passingと表現できるような) 継続的なものであることがわかる。

また引用⑤では、エピソード的性格がゲームに特有な性格とされており、ここからゴッフマンの分析がゲーム的分析とみなせることがわかる。

ところで、アグネスのパッシング (=性的通過作業) がゲームモデル (=ゴッフマンのパッシングのモデル) に不適合だ (引用⑥)、ということは、具体

的にはいかなる意味を持つのだろうか。このことを知るためには、「ゲーム」という言葉でガーフィンケルが何を考えていたかを明らかにしなければならない。引用⑤の補強として、引用⑦⑧が役に立つ。

まず、ゲームはプレーヤーに先行的に知られた基本的ルールを持っている（引用⑦）。また、ゲームは目標達成にかかわる評価基準を持っている（引用⑧）。ということは、ゲームでない場合には先行的に知られた基本的ルールがないということだろうし、目標達成にかかわる評価基準も持たないということだろう。

引用⑨⑩から非ゲーム的パッシングの場合の特徴を抽出すると、それは、自分の自我を意図的にコントロールするものではなく（引用⑨）、そこでの「規則（rules）」は相互作用の過程で学ばれるものであったということがわかる（引用⑩）。

これらの記述を総合すると、つまりガーフィンケルの主張は、アグネスはゲームとして分析できない（＝自覚的でない）さまざまな継続的パッシングをしているのだが、このような事態に対しては、ゴッフマン的な戦略分析＝ゲーム分析は有効ではない、ということになる。「ゲームモデルで分析できるパッシング」と、「ゲームモデルで分析しがたいパッシング」という見慣れない区分が導入されていることに注意すべきだろう。節の冒頭でも述べたように、実際のゴッフマンが、ガーフィンケルの描いているとおりのゴッフマンであるのかどうか、印象操作している本人の自覚を常に強調した理論家であったのかどうか、という点についてはここでは検討を行なわない。しかし、ゴッフマン批判の当否とは別の問題として、ガーフィンケルがパッシングに関して強調していたこと、すなわち、「ゲームモデルでは分析できないパッシング（終わりのない・非エピソード的で・達成目標の基準がない・非規則先行的というような特徴を持ったパッシング）」が存在する」ということは、エスノメソドロジー理解にとってたいへん重要なことのように思われる。つまり、上記のような特徴をもった「非ゲーム的パッシング」がエスノメソドロジーに親和的なパッシングであるというガーフィンケルの主張から、われわれはエスノメソドロジーの現象理解の特徴を、おそらくは行為の原理水準で知ることができると思われるからである。しかし、さきは急がないでおこう。まずは、「非ゲーム的パ



ッシング」のなされる際に、ルールがどのような位置にあるのかということの図式的確認から始めることとしよう。

## (2) パッシングの範囲とゲームの範囲のずれの確認

以下では、「ゲームモデルで分析できるパッシング (=ゲーム的パッシング)」と、「ゲームモデルで分析しがたいパッシング (=非ゲーム的パッシング)」というガーフィンケルのパッシングについての区分を出発点として、このような区分を成立させるエスノメソドロジーの現象理解の原理を問うていくことにしよう。

二種のパッシングを対比的に図式化することを当面の目的とする。そのために、ガーフィンケルが挙げている事例の内容確認をすることから始めることとしよう。

まずは、ゲームモデルで分析できる場合である。ガーフィンケルによって挙げられている例は、人目につかないところでスカート付きの水着に着がえることや、デートでの身体接触を丁重に断るやりかただった。それらの例は先述のとおり「エピソード的性格、事前の計画、規則に対する道具的知識についての信頼というゲームに特有の性格」〔ガーフィンケル、1967b:142=1987:256〕を持っていた、とされる。男性性を隠すという課題が明確なためだろう。

これに対して、ゲーム的分析が無効な場合はどのような場合とされていたのだろうか。それは、たとえば、「秘密の見習い (secret apprentice)」という用語で示されるような場合であった。アグネスは、料理の仕方やデートでの振る舞いに関しての、女性なら当然もっているべき技量や女性に望ましいものとされる受け身的態度を「それを知っていることがあたりまえのこととみなされている状況において、つまり当然彼女も最初からそれを知っているものとみなされている状況において学ばなければならなかった」〔ガーフィンケル、1967b:147=1987:263〕という。つまり状況をやり過ごすやり方に関して、それを行為者が前もって知っているのがゲーム分析可能な場合であり、それを行為者が知らないまま状況にたち向かわなければならないのがゲーム分析の無効な場合とされているのである。上述の「『規則 (rules) 』は、現実の相互作用の過程を通して、実際にその場面に参加し、しかもそこに含まれているリスク

を受け入れることによって学ぶしかなかった」〔ガーフィンケル、1967b:146=1987:261〕という事態はこのような事態だったのである。すなわち、この非ゲーム的バッシングは、自らの目標達成評価の基準やゲームの基本的ルールを、行為者が予期していないバッシングであり、なんとかかんとかその場をやり過ごすことによって事後的・遡及的に自らが乗り越えの課題としたルールを見い出していくようなバッシングであったのだといえよう。

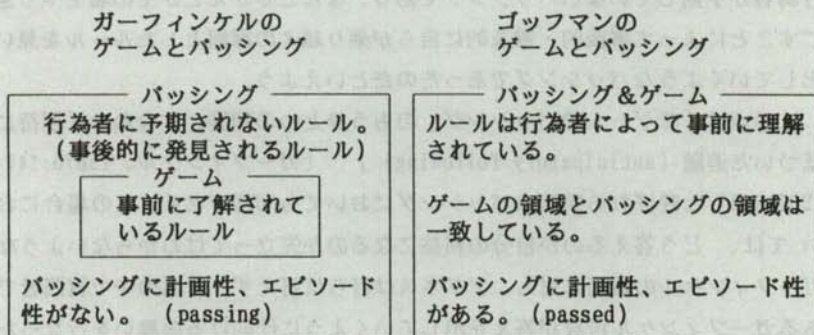
この点は「非ゲーム的バッシング」のもうひとつの類型、すなわち「期待に基づいた追従 (anticipatory following)」〔ガーフィンケル、1967b:147=1987:263〕と呼ばれるタイプのバッシングにおいても同様である。この場合においては、どう答えるのが自分の利益になるのか先立ってはわからないようなガーフィンケルの質問に対し、アグネスは自らは答えず、対話の中で質問者であるガーフィンケル自身が答えを示していくように仕向ける振舞いを行なったとされる。ここでもルールは前もって知られていたりはない。それは事後的に見いだされている。

さて、ここまでの議論をまとめよう。ガーフィンケルの取り扱っている二つのバッシングのうち我々が関心を寄せているのは、バッシングでありながらも、ゲーム分析が妥当しない場合の方である。少なくとも我々は、アグネスについてのバッシングの定義、すなわち「社会的に構造化された諸条件のなかで生ずるやもしれない露見や破滅の危険に備えながら、一人の普通で、自然な女性として生きていく権利を達成し、それを確保していく作業」〔ガーフィンケル、1967b:137=1987:246〕に関する条件がクリアされ、なおかつゲームでないという不思議な状況がガーフィンケルによって想定されていることを確認できるし、確認しておくべきである。ガーフィンケルに理解された限りでのガーフィンケルとゴッフマンの、2人のゲームとバッシングの関係を図示すると、以下のようになる。



図 1 ゲームとパッシングの関係についての2つのモデル

(〔ガーフィンケル、1967b〕より作成)



まず、図の左側、ガーフィンケルの場合の方から解説しよう。ガーフィンケルの場合、ゲーム的パッシング(小さい枠の中)の外側に非ゲーム的パッシング(外側のドーナツ部)を想定している点が特徴的である。このパッシングにおいては行為者が予期していないルールが存在し、パッシングに計画性、エピソード性がない。また、この継続的で終わることのない(=終わったと判断できない)パッシングはpassingと活動的な叙法で表現されなければならない非ゲーム的パッシングである。これに対し、〔ガーフィンケルの理解した〕ゴッフマンのパッシングは単一で、図の右側のように表される。それは、行為者の予期したルールにのみ関連しており、計画性とエピソード性をもつ。また、それは一回完結的であるという意味で、passedと表現することが可能な、そしてゲーム的なパッシングである。

確認しておこう。さまざまな特徴を挙げてきたが、ガーフィンケルがゴッフマンと自分は違うと主張している諸点のうち最重要と考えられる点は、「非ゲーム的パッシング」の場合に、行為者にルールが予期されていないパッシングが存在すると主張している点である。他の特徴(ゲームとパッシングの範囲のずれ、計画性の有無、エピソード性の有無)はすべてこの特徴に含まれ、ここから説明できる。

### (3) 「アグネス論文」と「相互反映性」

行為者にルールが予期されていないにもかかわらずパッシングが可能であるというような、ガーフィンケルの想定している状態はどのような現象理解に基づいているのだろうか。

おそらくは「相互反映性 (reflexivity)」が説明を与えてくれる。まず、アグネス論文のなかで、ガーフィンケルが相互反映性に言及している部分として、以下の部分をあげることができる。「成員たちが用い、頼り、注釈する相互反映性は、文脈依存的な質問や文脈依存的な応答のすべての実際的な目的にとって、合理的な適切さを評価したり例証したりするためのものである。」〔ガーフィンケル、1967b:180=1987:291〕。このメカニズムは先に見た「秘密の見習い」や「期待的追従」における現象理解、ルール形成のメカニズムだと思われる。すなわち、注釈の結果質問の意味や応答の意味がより明確になった(文脈依存性が気にならなくなった)としても、その明確さはもともとあった明確さが指示されたのだというよりは、注釈の過程で相互反映的に構成されたものであるという主張がここではなされている。もともとの明確さ(たとえば、自然な女性らしさ)をもたないアグネスにもある明確さの獲得(パッシング)が可能だったのは、このように適切さの評価基準をその場その場で構成する相互反映的な実践が存在したためであるといえよう。

我々の現実認識についての知見としての相互反映性は、アグネス論文を通して、さらに具体的に跡付けることができる。

たとえば、しばしば「パッシングの適否に関する判定基準」が相互反映的に定められていたことに気付くことができる。アグネスにおいて何が正しいかということについての「証明規則 (rules of evidence) は、共同体的な性格をもったものだった」〔ガーフィンケル、1967b:179=1987:289〕。しかもこのことは、我々が、われわれの採用している「基本的ルール」(=「パッシングの適否に関する判定基準」)が揺るぎのないものであると確信していること、と矛盾しない。違背実験に晒されていないわれわれ、性別を疑われやすい身体を持っていない、アグネスならざるわれわれは、自らの信頼の確かさを日々、相互反映的に確かめているのだから。この点についてはまた、アグネスが出来事に対する自分の評価の正確さ(=あたりまえのことをあたりまえのことと認識



する自らの評価の確かさ)を「公的に検証可能なもの」〔ガーフィンケル、1967b:179=1987:289〕と考えていたのと同様である。我々は自らの認識の客観性を相互反映的に確かめている。あるいはたかだか相互反映的にしか確かめていない。

以上のような議論の全体が、ガーフィンケルをして、バッシングのエピソード的ゲーム分析を非難させたのだらうと思われる。つまり、我々の日常的なバッシングにおいては、行為者が従わなければならないルールは原理的に相互反映的に構成されているのであって、もしこのルールをあらかじめ予期可能なものと前提してしまうならば、非常に特殊な、ルールの物象化の程度の進んだ場合にしかあてはまらない(リアリティのない)分析になるとガーフィンケルは警告しているのであろう。

ところで、「非ゲーム的バッシング」にはさらにひとつの特徴を付け加えておかなければならない。それは「非ゲーム的バッシング」が一般性・普遍性をもつものである、ということである。たしかに非ゲーム的バッシングは、まずはじめはガーフィンケルのアグネスについての分析から導かれたものである。けれども、ガーフィンケルはこの、ゲーム分析が不適当なバッシングの方をより普遍的なものだと考えていた。「もし、ゴッフマン流の社会成員を現実の社会に住まわせることによって、現実の社会の特徴を再構成しようとするなら、……構造的な不一致に見まわられてしまう」〔ガーフィンケル、1967b:174=1987:279〕という記述からは、ゲームを前提とした戦略分析の無効さを、一般的な無効さでもあると主張するガーフィンケルを見て取ることができるだろう。

とすると、一般的な特徴は、一般的な原因から説明されなければならないから、エスノメソドロジーにおいては「相互反映的な現実構成」の一般性が「予期されざるルールによる非ゲーム的バッシング」の一般性を導いているという仮説が成立することになる。このような仮説は妥当なものだろうか。

エスノメソドロジーにおいては、相互反映的な現実構成という現象理解が本質的なものであるということを、以下トラスト論文を材料に見ていこう。

### Ⅲ. エスノメソドロロジーの現象理解：基本的ルールの相互反映的構成

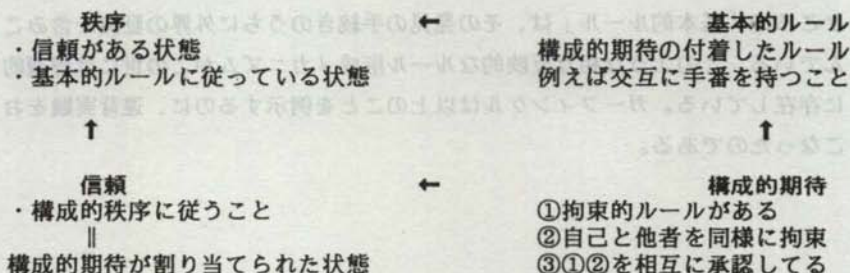
あるいは「トラスト論文」における基本的ルール

ガーフィンケルの主張する「基本的ルールの相互反映的構成」が普遍的なものであることを理解するのに、トラスト論文（「安定的で協調的な諸行為の条件としての『信頼』の概念と、その実験」）〔ガーフィンケル、1963〕が役に立つ。ここでもアグネス論文同様通常のゲームに対する信頼は崩され<sup>(5)</sup>、そのような非日常的状态のなかでの発見が語られている。

すなわち、三目並べ(ticktacktoe; 連珠のような二人ゲーム)のルールを破壊するという違背実験を通して、我々の従う基本的ルールが事後的共同的に構成されるものであるということが例示されているのである。「非ゲーム的パッシング」が普遍的なのは、秩序の基本的ルールが、相互反映的に、事後的に共同的に構成されるということがこのように一般的事態だからである。

もちろん我々は何が基本的ルールであるかということについて、通常素朴な信念・信頼をもって生きているが、この素朴な信頼に埋まっているとき(=ルーティーンに埋まっているとき)であっても基本的ルールの構成が相互反映的に成されていることにはかわりない。通常はそのことに気付かないだけなのである。トラスト論文の議論の前半を図示することによって、以上の議論を確認していこう。

図2 トラスト論文の構図(前半) (〔ガーフィンケル、1963〕より作成)





この図で重要なのは、参加者の構成的期待（①参加者の欲求や環境や利害関心に関わらず参加者を拘束する、競技者の数や動く順番等についての選択肢のセットがあると期待すること。②ある必要とされた選択肢のセットが、自分を拘束するのと同様に他者をも拘束すると期待すること。③自分が上述のことを他者に期待するように他者も自分にそのことを期待すると期待すること。）が、一群のルールに付着したときその一群のルールが「基本的ルール」となるという点である。この構成的期待が基本的ルールに先行するという主張は、その逆を想定してみたときにその価値がはっきりしてくる主張である。つまり、「基本的ルール」が先行して存在し、それに対して人々は正当にも「構成的期待」をよせているはずだというわれわれの通常的了解が現実認識として不適当であるということがガーフィンケルによって主張されているのである。違背実験の結果はこの日常的了解における認識の転倒を示唆したものである。三目ならべゲームにおいて、普通「基本的ルール」と信じられている内容とは異なった振る舞いを相手方プレーヤーからぶつけられたプレーヤーは、構成的期待を付着させるルールを切り替えてその場の秩序を保っていく（構成的アクセントの割り当て直し）。このようなことが可能なのは、もちろんゲームにおける「正常なプレイ」というものが「基本的ルール」ごとに異なって存在し得るからであるが、重要なのは何が「正常なプレイ」であるかを、ここでのプレーヤーはルールからではなく、他者の「（正常な）プレイ」から学びとっているということである。ルーティーン（＝普通の「基本的ルール」）に埋まっていたのは気付かない、我々の現実認識の根源的な相互反映性をガーフィンケルはここで呈示している。

議論をまとめておこう。我々がそれでもって外界の出来事を判断・評価するところの「基本的ルール」は、その発見の手続きのうちに外界の証拠を含みこんでいる。このような相互反映的なルール形成メカニズムがこの世には普遍的に存在している。ガーフィンケルは以上のことを例示するのに、違背実験をおこなったのである。

#### IV. 相互反映性の両義性

##### (1) 相互反映性の両義性

ガーフィンケルの相互反映的な現象理解のメリットは現象理解の統一性にあると思われる。

エスノメソドロジーは、さまざまな種類（たとえば客観性の程度が高かったり低かったり、因果的由来が明らかだったり不分明であったりする）の社会的事実を、いずれにしろそれらはひとびとの実践的推論のなかで、相互反映的に根拠付けられていると統一的に説明する。実践的推論の普遍性が統一的説明の意義を大きいものにしてくれている。ここがメリットだ。

ところで、相互反映的に統一的な現象理解をするということは、以下の肯定的側面と否定的側面の二側面を相互反映性に認めるということでもある<sup>(6)</sup>。すなわち、我々は、その場の状況的な文脈に依存した根拠しか持ち得ないという点で一種の無根拠さに拘束されているともいえる（否定的側面）。けれどもその一方で、相互反映的な実践的推論によって、人々は秩序すなわち意味を自己生成し得ている、ということもできる（肯定的側面）。

このように相互反映性は両義的な解釈を許すものである。この相互反映性の両義性は、秩序に対する我々の感覚的両義性と対応しており、現実に対するトータルな社会学的認識道具として相互反映性が良質なものであることをむしろ示しているといえよう。

##### (2) 相互反映性という無根拠さの意味

上記のような相互反映性にともなう普遍性と両義性の認識から主張されるべき最重要の点は、以下のことがらである。すなわち、ルール生成の背後に相互反映性（一種の無根拠さ）があるからといって、それがルールに従うべきか否かという態度決定問題に直接の影響を与えるわけではないということである。客観的とされている現象、科学的とされている現象に対し、その認識の背後に文脈に依存した実践的推論が存在するからといって、それらを一方的に否定的に恣意的なものだと断じてそれだけではあまり意味がないと思われる。まして恣意的なものだと断じた上で「信じる根拠／従う根拠」をそれらは持ち得ない



と論じるならば、それは「信じる根拠／従う根拠」を構成する実践的推論の存在の可能性に奇妙に鈍感な主張であるといえよう。文脈に依存して構成されていることが明確な規則も、文脈に依存していないと信じられている規則同様、信じるに値する可能性のある現象であるからだ。アグネスは、一般人には客観的と信じられている規則を文脈に依存した規則として発見したが、だからといってそれを無視したりはしなかった。ある規則に従うべきか否かという規則の妥当性問題は、その規則が文脈依存적であるかどうかとは別のところに基盤を置いて考察し得る問題である。この点は、「非ゲーム的パッシング」の検討を通して得られる、日本のエスノメソドロギー受容状況に関係して重要なひとつの教訓だろう。

私は、本節のここまでの議論を、『排除と差別のエスノメソドロギー』（山田・好井、1991）における山田富秋の議論を念頭において論じてきた。山田自身が「状況に不適切な行動を『精神病徴候的行動』としてカテゴリー化していくことには何の根拠もない」（山田・好井、1991:271）と判断しているかどうか、そのうえで、「客観的な『精神病徴候的行動』は存在せず、成員の恣意的な選択作業（カテゴリー化）があるだけ」（山田・好井、1991:271）と判断しているかどうか、そしてそれゆえ現在の「精神病患者」の扱いは根拠がないと主張しているのかどうかは、この著作の文面からでは十分には明らかではない。がしかし、もしそのような論理を立てているのだとしたならば、本節の議論に照らしてエスノメソドロギー的に重要な論点が脱落しているといえるのではないだろうか、こう私は主張したいのである。

エスノメソドロギー的立場に立つならば、いわゆる客観的判断基準に基づいていない判断にも、客観性や科学性が割り振られる可能性を認めるべきである。それが相互反映性の普遍性を認めるということだ。「人間は相互反映的にしか根拠付けられないあやふやな根拠で拘束を受けてはならない」という判断基準が山田の議論の背後には存在するようだが、相互反映的な意味構成の普遍性・蔓延性を認める立場からすれば、この判断基準は、拘束ということすべてを禁止する判断基準であるということになってしまう。もちろん、すべてを禁止する判断基準というのは、判断基準としての意味をほとんど持たないといえるだろう。

この世のすべての現象は、実践的推論に基づいて、相互反映性に基づいて成立している現象なのだから、その相互反映的であることを判断の基準とするのではなく、相互反映的であること以外のことを判断の基準とするような倫理的立場をこそ我々は構築すべきである。そうでなければ意味ある立場にならない。

まとめておこう。私の主張はまず、相互反映性の普遍性を我々は承認すべきだということである。ついでそのことの論理的帰結として、以下の点も主張する。すなわち、エスノメソドロロジーは実践的推論による現象理解を、それが実践的推論だからといって不当だと断じたりする道具立ては持っていない、ということである。私もこの世の意味理解に正当なものと不当なもの二種があることは認めるが、その不当さの根拠を「実践的推論に基づいていること（＝相互反映的に意味構成されていること、＝あやふやな根拠しかもたないこと）」に求めることには無理がある。そのような論理を立ててしまうならば、この世に正当なものが無くなってしまふからだ。

上述のものと違う例をあげて説明すると、以下のようになるだろう。山田らの編訳書『エスノメソドロロジー』には、山田の署名付きの「訳者あとがき」がある。そこで山田は「エスノメソドロロジーの実践とは、実際の具体的場面……におけるこの『リアリティ構成』の巧妙な『でたらめさ』あるいは『いいかげんさ』を解体していくこと」〔山田、1987:324〕という主張をしているが、たぶんここでは、実践的推論の無根拠さに関して強調しすぎな部分があり、エスノメソドロロジー的にいえること以上の主張がなされてしまっている。もちろん、「解体」されるべき『リアリティ構成』もあるだろうが、その根拠として「相互反映的リアリティ構成がなされていること」をあげるのは不当である。究極的には無根拠な現象理解しかありえないのだから、究極的な意味での無根拠さを現状の不当さの根拠とする論理は成立しないのである。

### （３）相互反映性の肯定的側面＝ある「精神病者」施設の事例から＝

前項で私は、相互反映性の否定的側面の扱い方に関してコメントを行なった。私はこの節を相互反映性の両義性から説き起こした。したがって今度は肯定的側面の方にも少しは言及しておくのが、議論のバランス上よりよいだろう。たとえば以下のような事例を参考に相互反映性の肯定的側面を考えてもらおうとよ



いかかもしれない。

事例は、ある公立の「精神病者」施設においてなされた、デイケアでの参与観察に基づいている<sup>(7)</sup>。

＝起きたこと＝

その施設では、デイケアが週四日行なわれていた。私は、新聞づくりに携わっていた班に加わっていた。この新聞は手書き原稿・輪転機印刷で、部員9名と職員2名がそれぞれ1頁を担当してほぼ月に1回つくることになっていた。あるとき部員のO君が新聞最終面のなぞなぞ欄担当になり「クロスワードパズルもどき」と「ヒラメキパスワード」と「連想ゲーム」という記事を原稿として書いたことがあった。

このうち「クロスワードパズルもどき」は、歌手6人の名前をかなに分解し、方形のますの目にランダムに散らばらせたものであったが、並んでいる順序が答えと無関係である点でクロスワードパズルとは異なるものだった。この原稿は、同一文字を2人の歌手が利用すること、答えが確定しないことなどから編集長（比較的年長の部員）の反対で没になった。残りの2種は採用され、新聞に掲載された。以下掲載されたクイズについて説明する。

まず「ヒラメキパスワード」について。これも、歌手の名前をかなに分解し、そしてそのランダムに並んだかなから、もとの歌手の名前を当てるという仕組みのゲームであり、ゲームが要求する作業の中核部分は、「クロスワードパズルもどき」と同一である。違う点は歌手が一人であること、および分解したかなを方形ではなく一行に書いていること、この2点である。具体的には「みなきじかまゆ」という文字列から歌手の名前をあてるというものであった。

つぎに「連想ゲーム」について。これは「何かを書きますので連想したのを書いて下さい」という設問文に始まるゲームであった。この設問文の下には、

「例 春→春一番、消しゴム→エンピツ」と出題者の連想に基づく例が挙げられていた。さらにその下に本当の問題として、「ビートたけし→？、寒い→？、心→？、わかんない→？」と4問の連想ゲームが並んでいた。出題者と同じのものを連想できるか否かがゲームの内容であった。

これらの二種類の問題は編集会議を通過し、しかもかなりの確率で「正答」

可能なものだった。この点は重要な点である。新聞読者は上記のような問題であってもその「解答」の存在を信頼し、ゲームを楽しむことができたのである。また、出題者O氏は編集会議できいた当初は上から順に、「中島みゆき」、「明石やさんま」、「なべもの」、「あたたかい」、「Fさん（“わかんない”がくちぐせの女性の新聞班員）」の5単語を問題の解答として答えた。しかし、会議中、連想ゲーム第四問のFさんという解答が、工藤静香に変更されたり、またFさんに戻ったりしたということが起こった。ここでは、出題者が解答を最初から心に決めていたわけではないという点がまず重要である。しかし、それにもまして、どの「なぞなぞ」を掲載するか決めることをしていた会議の前半部分では、誰も連想ゲームの具体的解答を出題者に求めなかったということがより重要であるように思われる。編集部員の信頼の厚みに思いを寄せてほしい。

#### =分析=

さて、観察によればこの「なぞなぞ」という意味を成り立たせていたものは以下のような状況の総合であった。

- 1) 例があげられていたこと  
たとえ解答の内容を探る役には立たなくても、解答があるということ自体を示すのに、例は貢献していた。解があるというゲームに必須の条件の乗り越えがこのようになされ信頼されていたがゆえにあの「連想ゲーム」が「なぞなぞ」として通用したという側面があるように思われる。
- 2) “正解者”に景品を贈るシステムが存在したこと  
景品が出ることは、解答があることの政治的・権力的重み付けになっていた。
- 3) 没原稿と生原稿がわけられたこと  
原稿の採否の基準が明示されなくても、問題が仕わけられることで選及的に採否の基準=妥当性の基準がこのクイズに対して存在したことになる。少なくとも没になった問題より、よりよい「なぞなぞ」が新聞紙面には提出されていると信じるのがこれによって可能になった。（答えが一義的に確定しないという点では、「連想ゲーム」は「クロスワード



パズルもどき」と同様であるという点に注意せよ)

#### 4) 解答が訂正されたこと

出題者O氏は、「連想ゲーム」第四問の解答を、「Fさん」から「工藤静香」に一時訂正した。これは、一見解答がO氏の恣意によって決定されていることの証拠のようにみえる。けれども、それが、編集委員会で解答の確認を行っていた席でなされたものであり、他の新聞班員から「え～、Fさんなの。工藤静香かと思った」とクレームともとれる発言を受けた際の反応であるということを考え合わせるなら、むしろ逆の解釈の方が妥当であろう。すなわち、ここで試みられたのは若干手際が悪いながらも一種の「期待に基づいた追随 (anticipatory following)」なのであり、出題者は自らの設定する「解答」が適切なものであると評価されるよう懸命の努力をしていたのである。このようにして、「解答」の適切さは守られていた。

#### =考察=

この新聞最終面の「なぞなぞ」がゲームとして成立するためには、各問題に「解答がある」ということが重要な基礎条件であった。しかし、この「解答がある」という現象理解がどのように人々に認められていたかということ、それは「解答があることになっている」というさまざまな状況証拠(例がある、景品がある等々)から「相互反映的に」認められていたにすぎない。

具体的にいえば、この「なぞなぞ」の事例でひとびとは、「解答」があるという、相互反映的にしか根拠付けられていないあやふやな実践的推論に基づいて、クイズの正答と不正答を判断し自分の答えを出し、景品まで出したり受けたりしていたのである。そして、その「解答」の存在を前提とした振舞いの全体が、ひるがえって「解答」の存在に対する人々の信頼を支えていたのだった。もちろんここで起きたことを「恣意的に『正答』を作ることで人間を愚弄している」と否定的に論じることでもできるが、逆に同じ事態を、「『正答』を作ることでクイズ製作者の人格を守った」と肯定的に判断することもできるはずである。むしろ、私には、このようにして人の体面は守られるのか、という驚きが当時あった。いささか強引かもしれないが、この事例は、「ルール」が「相

相互反映的」に決定されるということをも恣意的で無根拠であると否定的にだけ意味付けることの不毛性を示唆してくれているといえるのではないだろうか。

## V. おわりに

1969年に最初の紹介〔ニシオ&竹中、1969〕がなされて以来、エスノメソドロロジーはかなり活発にわが国に紹介され、新しい社会学理論のひとつとしてそれなりに定着をしてきた。けれども現在までの日本におけるエスノメソドロロジー理解には「“解放的関心”に直結するものとしてエスノメソドロロジーをとらえる」という観点に由来すると思われる、相互反映性の普遍性に対していささか不理解で一方的な、根拠の曖昧さを否定的にとらえすぎる傾向が存在したように思われる。従来のエスノメソドロロジー受容のされ方を誤りだ、歪みだと非難する気はないが、ルール生成やカテゴリー化の陰湿さ・差別性のみを強調した主張だけがエスノメソドロロジー的主張として流布している状況はあまり妥当なものではないと思う<sup>(8)</sup>。

もし、我々がアグネス論文でみてきたような相互反映性の普遍性を、エスノメソドロロジーの原理として認識するのならば、例えば、被差別者向けのエスノメソドロロジー的解放戦略も変わってくると思われる。具体的には「“根拠のはっきりしない（被差別者認定）ルール”を攻撃し、“根拠のはっきりした（被差別者認定）ルール”を求める」という解放戦略の方向は再吟味されなければならないだろう。少なくとも「常識批判」を徹底しようとするならば、従来とは別の方向を探さなければならないはずである。というのも、もし新しい根拠が前の根拠よりも確定的なものに思えるとするならば、その認識は、前の根拠が依拠していた常識より、より深い常識に新しい根拠が依拠している状況からもたらされたものであると予想できるからである。このような予想が成り立つ以上、常識批判を徹底的に主張する立場は、「確定的な根拠を求める」という戦略をとるわけにいかないのである。

現代では、一瞥してそれが差別であると明らかに認識されるような「いわれなき差別」は減少している。現代の差別はどれも、「いわれある区別」の衣服



をまとっている。いいかえれば、現代で問題にされる差別は常識に深く埋め込まれた差別なのである。この現代的状況を解きほぐし、対抗戦略を構築する道具立てを我々はエスノメソドロロジーから入手できるだろうか。相互反映性の普遍性を認めたうえで常識を扱うエスノメソドロロジーには可能性があると私は思っている。少なくともそのような方向でエスノメソドロロジーの価値を主張する研究はもっとなされてよいはずであり、私のここまでの議論がこの方向の研究をわずかなりとも刺激するものになっていれば本稿の課題の過半は果たされたということができよう<sup>(9)</sup>。

#### <註>

- (1) いままでのすべての日本のエスノメソドロロジー研究が、この時期区分に当てはまると主張するつもりはない。主要ないくつかの研究について、流れをイメージしやすいよう便宜的な意味付けを試みただけである。意識されている業績は、第一期としては、〔ニシオ&竹中、1969〕、〔加藤、1978→1986〕、〔山口、1975→1982〕、第二期としては〔江原・好井・山崎、1984〕、〔好井、1989〕等々である。なお、現在までのエスノメソドロロジーの研究成果を文献的に総覧するには、欧文では〔フェアー&ステットソン&水川、1990〕が、和文では〔水川、1990〕が便利である。
- (2) もちろん、理論形成的という形式的特徴だけでなく、理論内在の特徴も存在する。私見によれば、それは「ミクローマクロ」という従来の社会学理論に対する区別をエスノメソドロロジーの立場から止揚しようと試みるものであり、山崎の言い方を借りれば、『『意味と社会システム』『主観的意味と客観的規則』『個人と社会』といった従来の社会学的思考を支配してきた二分法がはたして成立可能なのか、もう一度考え直して』〔山崎、1990:7〕みるものである。このような方向性は、秩序理論としてエスノメソドロロジーを考える方向性〔榎田、1990〕と親和的であるといえよう。
- (3) 〔榎田、1991a〕は、〔榎田、1991b〕にその一部が発表されている。そこで榎田は、「精神障害者」の処遇にあたって、「主体性をもて」や「自発性をもて」という通俗道徳の押しつけが「ノーマライゼーション」の名目のもとでなされてしまう危険性があること、および、そのような通俗道徳の外側に「主体性を示せ」という通俗道徳の要求から自由になって、非・主体性表示的に、他者の命令的意図を「疑心暗鬼」しつつ生きる権利というものを障害者に認める」という「もうひとつのノーマライ

ゼーション」の方向があり得ること、この二点を参与観察をもとに主張した。

すなわちそこで私は、「人間的であること＝自発的であること」という意味連関を前提とした、「自発性を持ってないかわいそうな障害者に、いかにして自発性をもたせるか」という常識的な・障害者に達成困難な努力を強いかねない・反差別理論に対し、そのような反差別の方向とは異なる「人間的であるためには、必ずしも自発的である必要はない」という別種の意味連関を前提とした、「自発的でない障害者にもいかにして人間性を認めるようにするか」という没常識的な・けれどももしかしたら障害者にとってより容易に受容可能なものかもしれない・アルターナティブな反差別理論を対置したのである。

「他人をむやみに疑わないようにせよ」という、施設的环境下では従うことの困難な規範的命題を、無視するべきものとして、従う必要のないものとして、とり扱った。

- (4) 以下の本稿における引用文には、文脈や前後関係の違いから、必ずしも邦訳に忠実には従っていない部分が存在する。また、見易さを考慮して、訳文の一重かぎっこ(「」)を二重かぎっこ(『』)に特別断らずに直している場合もある。なお、引用文中の〔 〕は、その内の語句を引用者が補ったことを示しており、……は、その部分に省略があることを示している。
- (5) アグネス論文とトラスト論文は、非日常的状況のもとでゲームを崩し、そのゲームが崩れた状態で生じる現象を通して日頃は隠されている現実構成のメカニズムを確認するという同じ問いかけの構造を持っている。アグネス論文では、九つの形式的特徴がゲームの特徴としてあげられていた〔1967b:140f.=1987:253f.〕が、トラスト論文でもほぼ同一の内容がこちらは十個に分けて述べられている〔ガーフィンケル、1963:207f.〕。
- (6) 「ストラクチャー論文」〔ガーフィンケル&サックス、1970〕は、この点を明確に述べている。人々は、言葉の意味のインデックス性(indexicality: 文脈依存性)を矯正(remedy)しようとして、意味の定式化(formulation)を行なうけれども、意味の定式化は注釈(gloss)をとらなわざるをえず、注釈はまた一般的なインデックス性から自由ではないので、結局、ひとはインデックス性を矯正しきることはできない(矯正すればするほど矯正の対象が出現してくる)。
- けれども、これは定式化(矯正)が不可能であるということではない。実際的には、人は意味の不確定性に迷っているというよりは、そのようなものとして自分達の意味確定作業を行い、意味理解をしているのである。樫村の解説〔樫村、1989:100f.〕がわかりやすい。



- (7) 以下の事例は、既報のもの（〔榎田、1989〕、〔榎田、1991a〕、〔榎田、1991b〕）と同一の施設における参与観察から得られたものである。しかし、観察の時期はことなる。
- (8) 日本における近年のエスノメソドロロジー研究の代表的作品である『排除と差別のエスノメソドロロジー』（山田・好井、1991）は、常識批判の立場を明確にとり、かつカテゴリー化に対して否定的であるが、この著作に対して那須は、「常識の両義性について、それゆえにまた生活世界の両義性とカテゴリー化の両義性について」（那須、1991:2）議論がなされていればなおよかった、という評価を与えている。私の立場は那須の立場に近い。
- (9) 本稿をまとめるにあたってたくさんの方々から御助言・御助力を賜った。とりわけ、三度にわたった「論文検討会」において、いまだ草稿段階の拙稿に対し熱心で適切なコメントを施して下さいたコメントーターの才津芳昭氏（日本学術振興会）、浜日出夫氏（筑波大学）、岡田光弘氏（東京大学）の三氏には、その芳名を記させて頂き特別の感謝を捧げたいと思う。

#### <文献>

- Coulter, Jeff 1979 THE SOCIAL CONSTRUCTION OF MIND: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy, THE MACMILLAN PRESS LTD.
- 江原 由美子・好井 裕明・山崎 敬一、1984「性差別のエスノメソドロロジー——対面的コミュニケーション状況における権力装置——」、『現代社会学』18:143-176。
- Fehr, B.J., Jeff Stetson, with the assistance of Yoshifumi Mizukawa 1990 "A Bibliography for Ethnomethodology", Coulter, Jeff (ed.) 1990 Ethnomethodological Sociology, Edward Elgar Publishing Limited.
- Garfinkel, Harold 1963 "A Conception of, and Experiments with, "Trust" as a condition of Stable Coordinated Actions", Harvey, O.J. (ed.) Motivation and Social Interaction, Ronald Press:187-238. (略称: トラスト論文)
- Garfinkel, Harold 1967a Studies in Ethnomethodology, Prentice-Hall, Inc. →1984, Polity press.
- Garfinkel, Harold 1967b "Passing and the managed achievement of sex status in an intersexed person, part1", Studies in Ethnomethodology, Prentice-Hall, Inc.:116-185, 285-288. =1987 山田 富秋・好井 裕明・山崎 敬一抄訳「アグネス、彼女はいかにして女になり続けたか——ある両性の人間の女性としての通過作業とその社会的地位の操作的達成」、山田・好井・山崎（編訳）『エスノメソドロロジー』、せりか書

- 房:215-295。(略称:アグネス論文)
- Garfinkel, Harold & Harvey Sacks 1970 "On Formal Structures of Practical Actions", John C. McKinney & Edward A. Tiryakian(eds.) Theoretical Sociology: Perspective and Developments, Appleton-Century-Crofts:337-366。(略称:ストラクチャー論文)
- Goffman, Erving 1959 THE PRESENTATION OF SELF IN EVERYDAY LIFE, Doubleday & Company Inc.. = 1974 石黒 毅訳、『行為と演技 — 日常生活における自己呈示 —』、誠信書房。
- 樫田 美雄 1989 「社会福祉サービスにおける〈親密さ〉問題 — ある精神障害者社会復帰施設でのクラブ活動事例を参考にして —」(1989年3月19日言語研究会報告レジュメ)、ミメオ。
- 樫田 美雄 1990 「エスノメソドロジーと秩序問題、あるいは「慣行」の理論的位置」第63回 日本社会学会大会(京都大学)会場配布報告レジュメ、ミメオ。
- 樫田 美雄 1991a 「社会学における秩序問題 — ハロルド・ガーフィンケルの作品およびA市中間施設参与観察データからの若干の考察 —」 筑波大学大学院博士課程社会科学部研究科中間評価論文(筑波大学社会学研究室在)。
- 樫田 美雄 1991b 「施設内文化の研究 — 二つの悪循環過程の例示とその意味の考察 —」、『母子研究』11:12-27。
- 樫村 志郎 1988 『「もめごと」の法社会学』、弘文堂。
- 加藤 春恵子 1978 「日常生活における意味付与活動」、吉田 民人(編)『社会学』、日本評論社。→1986、加藤 春恵子 『広場のコミュニケーションへ』、勤草書房:135-158。
- 水川 喜文 1990 「エスノメソドロジー文献集(改訂版)」、水川 喜文 『Harold Garfinkel とエスノメソドロジー運動 — 歴史的展開および理論的基礎 —』(第二部)、東京都立大学社会科学部研究科修士学位论文、(東京都立大学図書館在):1-116。
- 那須 壽 1991 「書評『排除と差別のエスノメソドロジー』」、『図書新聞(1991年8月31日発行)』2067:2。
- ニシオ、ハリー・K & 竹中 和郎 1969 「アメリカ社会学における現代的課題 — 民俗学的社会学方法(Ethnomethodology)と一般社会学方法との交錯 —」、『社会学評論』20-1(77):73-90。
- 西阪 仰 1990 「心理療法の社会秩序Ⅰ — セラピーはいかにしてセラピーに作りあげられていくか —」、『明治学院大学社会学部附属研究所年報』20:1-24。
- 西阪 仰 1991 「独り言と「ながら言」 — 心理療法の社会秩序Ⅱ —」、『明治学院論叢』475(社会学・社会福祉学研究第85号):1-25。



- 山田 富秋 1987 「訳者あとがき」、山田 富秋・好井 裕明・山崎 敬一  
(編訳)『エスノメソドロジー — 社会学的思考の解体 — 』、せりか書  
房:311-328。
- 山田 富秋・好井 裕明 1991『排除と差別のエスノメソドロジー —くいま—  
ここ>の権力作用を解読する—』新曜社。
- 山田 富秋・好井 裕明・山崎 敬一(編訳) 1987『エスノメソドロジー — 社  
会学的思考の解体 — 』、せりか書房。
- 山崎 敬一 1990「いかにして理解できるのか — 『意味と社会システム再  
考』 — 」、『理論と方法』5-1:7-22。
- 山口 節郎 1975「現象学と社会学」、『現代社会学』第三巻:頁数不明。→  
1982山口節郎『社会と意味 — メタ社会学的アプローチ — 』:74-132。
- 好井 裕明 1989 「確認・糾弾会のストーリー — <反差別の意志>を日常  
生活空間へ痕跡させるプロセス — 」、『解放社会学研究』3:24-42。
- 好井 裕明・山田 富秋、1987「エスノメソドロジーの戦略」『談』39、た  
ばこ総合研究センター:39-48。

(かしだ よしお/筑波大学大学院)